新会長挨拶

活発さを誇り続ける学会に*

亀屋　隆志　Takashi Kameya

博士（工学）
平成３年　横浜国立大学大学院工学研究科博士課程前期修了
同年　(株)野村総合研究所入社
６年　長岡技術科学大学助手
10年　横浜国立大学工学部講師
14年　同大学院工学研究院助教授
18年　同環境情報研究院助教授
31年　同教授
日本水環境学会論文賞

2025年6月24日に開催された第143回理事会において本会の会長を拝命しました。重責に身の引き締まる思いですが，これから2年間，25名の理事，3名の監事，20余名の運営幹事，延べ約200名の各種委員の方々と協力して，本会のさらなる発展に向けた運営に取り組んで参りますので，よろしくお願いいたします。

さて，本会で不思議に思うことがあります。多くの学会同様に会員数の減少が憂慮される中，本会では毎年3月の年会での参加者数や発表数が減少せず，むしろ増加している不思議です。本会の特徴が外部へ説明される際にはこの活発さがアピールされることもしばしばです。実際，会員数（個人，団体，学生）は2002年度末に3,293名でピークとなり，その後毎年60名ほど減少し，2020年度末には2,099名になりました。2024年度末時点では2,255名と若干の回復も見られています。一方，年会では参加者数が1,200～1,300名前後，発表者数が600～700名前後で維持され，直近の2025年3月の年会では過去最高の1,588名が参加し，831件の研究発表が行われました。衰退どころか活発さが増し続けていると言っても過言ではありません。この不思議な状況を味わい続けたい気持ちが会員個々の共通認識となり，深層心理の活動目標にもなっているのではないかと思います。

本会の活動を振り返りますと，学会誌の発行や年会やシンポジウムやWETでの研究成果発表，各種セミナーの開催などを通じた情報発信のほか，産官学連携活動やIWA活動の支援・協力，国際学会の誘致，水生生物調査資料の頒布や水環境文化賞・みじん子賞の授与などの社会連携・貢献活動も展開しています。また，顕彰による若手育成や学生との交流活動も積極的に行っています。こうした一つひとつの活動が活発に取り組まれていることによって，多忙な年度末に行われる年会へ産官学から多数の参加者を招き寄せているに違いないと思います。

西嶋渉前々会長の下でとりまとめられた「将来ビジョン」に基づいて池道彦前会長の下では「次なる50年」を標榜して様々な取り組みが行われました。具体的には，学会事務局での多様な雇用形態の実現や体制強化，前回の更新から約15年を経過して機能の老朽化が散見されるようになった会員管理システムの更新着手，大気環境学会との異分野交流，緊急を要する社会ニーズに対応したPFAS処理技術研究委員会の立ち上げなど，忙しく変わっていく時代や社会の変化に対応しながら具体的な進捗が図られてきました。

こうした取り組みと経験を土台にし，さらなる発展につなげるため，今期は学際連携推進委員会が設置されました。昨期に発足した将来ビジョン推進委員会を発展的に改組し，池道彦前会長が将来ビジョンの中で最も重要視された「異分野および多様な主体との連携・協働による超学際的な取り組みの推進」をさらに具現化していきたいと思います。学術中長期計画実現に向けたセミナー・シンポジウム等の積極展開のための資金も用意して活用できるようになっていますので，学会内での連携・協働の活動展開はもちろん，異分野・異業種間での連携や政策担当者との交流，他学協会とのネットワーク構築など，会員一人ひとりからの積極的な「手上げ方式」で活発な活動が展開されることを歓迎したいと思います。

また，今期は会員相互のつながりを強固に再構築していくための取り組みにも尽力したいと思います。コロナ禍は人間関係を大きく分断するきっかけになってしまいましたが，リモート化などによる新しいチャネルを普及させるよい機会にもなりました。本会の運営は，一部の専門的業務を除けば，基本的にどれも手作りで行われていますが，気が利く事務局が扇の要となり，大学や企業，行政などでそれぞれ本務を抱えている一人一人の会員が各種委員や支部の理事・幹事といった肩書で都度に実行部隊を構成し，皆がお客様ではなく勉強と工夫を重ねながら支えています。こうした人と人とのつながりやノウハウを常に再構築していくことも活発な学会活動を支えるための重要な基盤強化につながると認識しています。活発な会員の皆様による活発な活動は無限に拡がります。皆様のご理解ご支援ご協力を賜りまして，常に活発に活動する組織として誇れる学会を目指す努力をして参りたいと思います。

＊　To Continue JSWE to Take Pride in Activeness